

Kandai Style

2021.1 Vol.486

関西大学通信



2020

コロナ禍の大学生活を
振り返る

2020 コロナ禍の 大学生活を 振り返る

昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、全国の大半の大学が遠隔授業（オンライン授業）を取り入れました。関西大学でも、春学期は2週間の休講期間を経て、インターネットを活用した遠隔授業を実施しました。秋学期は感染拡大予防策を講じた上で、原則として対面授業を行っています。

これまでとは全く異なる対応を求められた2020年の教育現場で学生の皆さんや教員がどう取り組んだのか、特集と関大誌上教室で振り返ります。

「関大LMS」は予習や復習のほか、課題レポートの提出や質問もできる学習支援システム。キャンパスにほとんど通えないまま大学生活が始まった新入生にとって、遠隔授業の情報が集まる関大LMSやZoom、Dropboxなどを活用して受講したり、課題を提出するのはほぼ初めてのことでした。

6月からは先輩学生による「なんでもオンライン相談」が始動。大学生活全般に関する不安や悩みを抱える新入生からの質問に、授業支援SA（スチューデント・アシスタント）が関大LMSを利用して対応しました。

遠隔授業で始まった春学期。
新入生の悩みは先輩が解消！
新しい学びを支え合いました。

最後まで諦めない！
やり遂げたことは必ず自分に返ってきます。

なんでも
オンライン
相談

学生が授業に集中できるようにサポートする授業支援SAに1年次からなりたいたいと思っていました。念願がかなって2年次の春学期からSAに。昨春は窓口業務がなくなりましたが「なんでもオンライン相談」の相談員を務めました。印象に残っているのは課題に対する相談です。課題の多さに悩む学生に掛ける言葉を考えるのは難しかったですが、相手の話に共感する気持ちを大切に、自分自身の経験からアドバイスをしました。

相談者への回答は他のSAと読み合わせをしながら完成させます。他の人の表現はとても参考になり、自分の文章力の向上につながりました。人の悩みや意見を聞くのも勉強になりましたし、SAとの交流で視野が広がっただけでなく、例えばラーニング・

コモンズでの学習支援など新たな発見もありました。

4月からは社会人になります。これから想定外のことは起きるかもしれませんが、妥協せずにベストを尽くせば、その努力はきっと誰かが見ているし、必ずどこかで報われると信じて頑張っていきたいです。

授業支援SA
酒井 亨樹 さん
(法学部4年次生)

新入生の
ための

友達づくり支援サイト 「触れずにフレンズ」を開設

学内で交流を図り、友情を育む機会がほとんどない新入生のために、関西大学教育後援会では新入生友達づくり支援サイト「触れずにフレンズ」を7月に開設。約3,000人の新入生がログインし、自分の所属学部や趣味のトピックを通じて交流を図りました。



実行委員長に
インタビュー
しました！

課外活動団体の新歓オリエンテーション

誰のためのオリエンテーション？

自己満足になっていないか、自分に問い続けました。

どうしたら、新歓オリエンテーションが実現できるのか？ 時期や実施方法を考えては、学生センターとミーティングを重ねました。秋学期の授業開始に合わせて開催できそうだと方向性が決まったのは9月上旬。それからは、今までと違った新しい形での実施に向けて、250にも及ぶ団体との連絡会議や書類の受け渡し、日程調整などをオンラインで進めました。

9月21日、新入生にとっては初登校の日。実行委員は桜をイメージしたピンクのジャンパーを着て、新入生を迎えました。授業で忙しい中、みんなが参加してくれるか心配でしたが、終わってみれば来場者は2日間で2,720人に上りました。

新入生からの喜びの声や各団体からの感謝やねぎらいの言葉、全てが私の宝物です。途中で何度も諦めそうになりましたが、実行委員会の仲間がいたから最後までやり遂げることができました。今後はこの経験を後輩に伝え、次のオリエンテーションのために協力していきたいです。

オリエンテーション実行委員長
伊藤 未麗 さん
(文学部3年次生)



春学期は80本の動画を配信。
対面でも遠隔でも、全力で授業に臨んでいます。

春学期の授業は、前回の講義への質問に答える「質問回答編」と「講義本編」の2部制でYouTube配信をしました。できる限り対面授業に近づけることを意識して、板書する様子を見せたり、目線をカメラに合わせて話したりして臨場感を出す一方、板書中のチョークの音を抑えて早送りにする、要点をまとめたスライドを入れるなどの工夫を凝らし、約60～90分の動画を80本作りました。

対面授業では休み時間の制約もあり、質問に来るのは多くても5人まででしたが、遠隔授業では1回の授業に対して50人以上の学生が

質問や感想を寄せてくれました。次の講義で全ての質問に回答したので、学生も次の授業を楽しみにしてくれたのかもしれませんが、1本の動画を編集するのに約5時間、それ以外にもスライド作成や撮影環境の準備など作業は大変でしたが、学生の反応が何よりもうれしく、リアルタイムの授業でなくても遠隔授業が成立することがはっきりしました。

哲学は知識として覚えるのではなく、身近な事柄を徹底的に問い、人が気付かなかったところを問題にするのが醍醐味です。大学で求められるのは、自分が何を考えたかを人に説明し、予備知識のない人に伝えられる力。対面授業でも遠隔授業でも、能動的に授業を受けてほしいと思います。



文学部
三村 尚彦 教授

秋学期からは対面授業が再開。
初めて通学する新入生も、
久しぶりにキャンパスに戻った学生も
笑顔が溢れました。

秋学期からは対面授業を再開し、受講生の多い授業はオンデマンド配信を行っています。登校前の検温や手洗い・消毒を促すとともに、教室では学生同士の距離を確保するなど、感染拡大予防策を徹底。久しぶりに活気が戻ったキャンパスにはマスク姿の学生が元気に通学しています。

遠隔授業と対面授業、それぞれの良さを引き出す工夫を先生に聞きました。

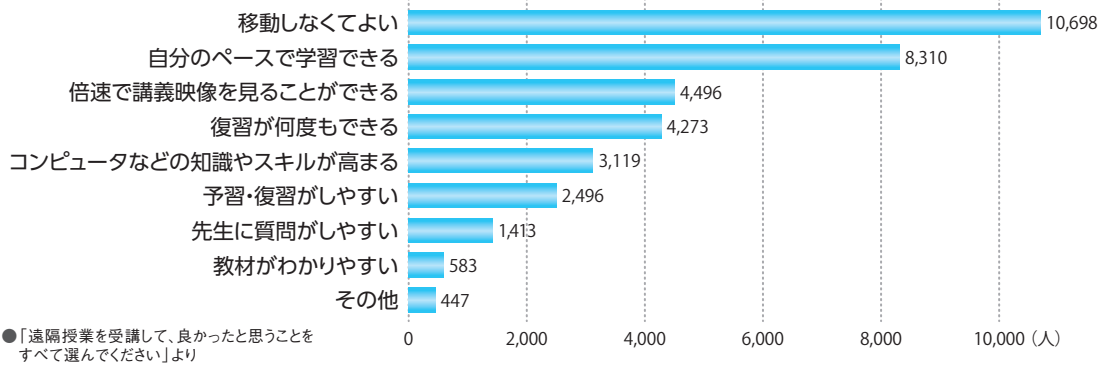


振り返る コロナ禍の大学生活を

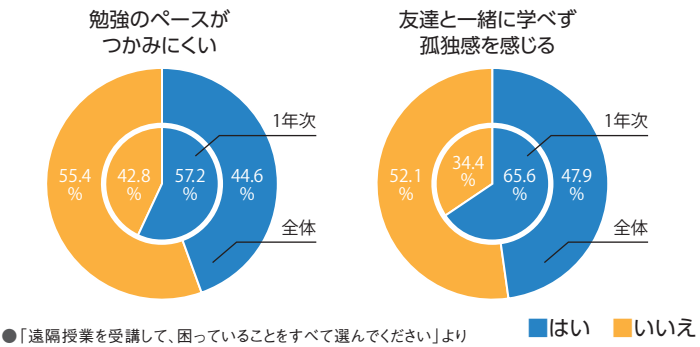
キャンパスライフにどのような変化があったのかを尋ねました。皆さんの回答から、遠隔授業・対面授業それぞれの特徴や仲間と学べる環境の大切さなど、さまざまなことが見えてきました。7月に行われた「遠隔授業に関するアンケート」とともに振り返ります。

遠隔授業に関するアンケート(教学IRプロジェクト) アンケート期間:2020年7月6日~7月31日 対象者:学生 回答者:12,655人

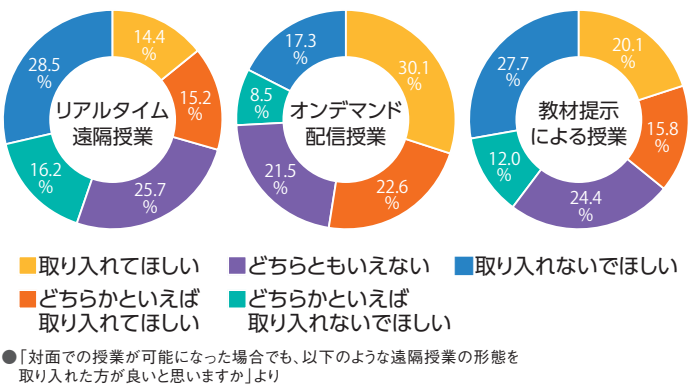
春学期実施アンケート 遠隔授業について良かったと思う点



春学期実施アンケート 遠隔授業を受講して、困っていること



春学期実施アンケート 対面授業時にも取り入れた方がよい授業形態



アンケート結果から

春学期の遠隔授業は「自分のペースで学習できる」「倍速で講義映像を見ることができる」「予習・復習がしやすい」などの点で肯定的に受け止められ、秋学期以降もオンデマンド配信授業を希望する割合が高い結果となりました。「移動しなくてよい」と回答していた人も多く、効率よく学習に取り組んでいたと予想されます。その一方で、特に1年次の半数以上が「勉強のペースがつかみにくい」「友達と学べず孤独感を感じる」と回答していました。

秋学期は、グループワークや実習、語学の授業などで対面授業の良さを改めて感じたという声が多く、先生への質問のしやすさや図書館等の施設利用を例に挙げ、より学びを深められるという意見もありました。また、オンラインと対面をうまく組み合わせながら仲間と交流しているようです。特に新入生からは、ようやく大学生になったことを実感した喜びの声が多く寄せられました。

感じているようです。他方、勉強のペースがつかめない、モチベーションの維持が難しいなど、慣れないスタイルに戸惑った学生も多いようです。秋学期は原則対面授業になりましたが、遠隔授業を取り入れてほしいといった声も出ています。今後は、対面授業と遠隔授業を効果的に組み合わせた授業実践が求められます。大学生活について、特に新入生は、入学後から一人で画面と向き合う日々を過ごすこと

PROFESSOR'S COMMENTS 教育推進部 山田剛史教授

今回のコロナ禍は学生生活にどのような影響をもたらしたのでしょうか。春学期の遠隔授業を経験して、多くの学生が時間的・物理的制約を受けずに学べるといったメリットを

アンケート「2020年の大学での学びを振り返る」(関西大学通信) アンケート期間:2020年10月30日~11月20日 対象者:学生 回答者:85人

Q 秋学期になり対面授業が始まりました。春学期と比較して良かったことや変わったと感じたことについて、自由にお聞かせください。

授業・勉強について

先生の顔を見て授業を受けることができるので、春学期と比べると集中しやすい環境で過ごせていると感じている。自習の場として図書館を利用しているが、利用人数が多いのにとっても静かでWi-Fi環境も良く、集中して勉強に取り組むことができている。 **文学部1年次生**

多くの授業を受けているわけではないが、パソコンの画面にとらめっこしているのと、教室で先生の話を生の声で聴くのとではモチベーションに大きな差があることを痛感した。研究活動では、毎週のミーティングは対面、研究室全体の発表会は発表者のみ対面というのが現状。種々の制約がある中で、対面授業が開始されたことに大いに感謝している。 **システム理工学部4年次生**

対面になって一番良かったと思うのは体育。春学期は1人でストレッチや筋トレをしていて、あまり楽しくなかったが、今はやりたいスポーツがしっかりできてとても楽しい。全て対面よりも対面とオンラインが同じくらいの比率である方がよいのではないかなと思う。 **法学部1年次生**

周りに人が実際にいる状況で講義を受ける方が気が引き締まった。少人数制の授業はより安全に徹した環境で取り組めているので安心して受講できる。 **総合情報学部3年次生**

オンライン授業と対面授業が併用になって、「この曜日は学校に行かない」などと自分のライフスタイルに合わせて時間割を決められ、時間を有効活用できるようになった。 **文学部2年次生**

対面授業とオンデマンド授業の同時開催は、遠方から通学している学生にはかなりハードなスケジュールになっているのではないかな。オンデマンド授業は課題が多すぎて、電車などで通学している学生は移動時間中に課題をすることが困難なため、課題を消化する時間的な余裕がなくなってしまう。授業方式はどちらか一方であってほしい。 **総合情報学部3年次生**

春学期のように毎時間の課題がない分、楽にはなったが学習に対する意欲は下がった。課題があるから授業をしっかり聴かなくては、という気持ちがあった方が日々の授業も面白かったし、毎日が充実していた。 **文学部1年次生**

課外活動・友達づきあいなどについて

春学期は全く友達と会うことができなかったのが、秋学期が始まった時は本当にうれしかった。友達が近くにいて、自分のモチベーションアップにもつながるし、就活などに有利な情報も手に入れやすと感じた。 **政策創造学部2年次生**

コロナへの自分の意識と周囲の意識にギャップのようなものを感じるがよくある。対面授業が始まって良かったと思うことは多くあるが、あまりコロナを気にしていない人にどう対応すれば良いか、遊びに誘われたらどう答えようかなど思うことがある。 **文学部2年次生**

春学期には情報を交換できる友達が欲しいと思っていたが、何が何でもとりあえず友達が欲しいとは思っていなかった。授業が始まってからも、大学はむしろ1人で学ぶところなのでは、と思うようになった。もちろん友達がいるに越したことはないと思うが、大学の本質は人との出会いというよりは学びにあると思う。また、友達ができなくて不安という人が多数だと思うが、そうではない人も一定数いると思う。 **法学部1年次生**

学生団体に所属しているが、対面でのイベント開催が難しいため現在は2週間に一度オンライン交流会を開いて、毎回10~15人ほど楽しく意見をシェアしている。東京に住む学生や社会人を含めたメンバーで交流でき、とても有意義な経験が得られていると感じている。 **法学部4年次生**

電車で繁華街に出掛けることやイベントに行くことが少なくなった一方、車やバイクといったソーシャルディスタンスが確保できる交通手段を用いて、少人数で郊外に出掛ける機会は増えた。 **理工学研究科D2**

INTERVIEW

入学するまでパソコンに慣れていなくて、初めは基本的な操作や課題の提出方法に戸惑いました。画面を見ていると目が疲れてしまい、お風呂で目を休めたり、歌ったりしてリフレッシュ。遠隔授業では受講や課題をためがちでしたが、秋学期になって「授業を受ける」と「課題をする」というリズムがきちんと整い、勉強へのやる気につながっています。わざわざメールで聞くほどでもない質問も直接できるようになり、中国語や経済学の授業を毎回楽しみにしています。

横浜出身で同じ高校の人がいないため、春学期は友達がほとんどいませんでした。9月のオリエンテーションに参加し、ハロプロ研究会に入部。オンラインで開催された新歓で友達もさらに増え、入学前にイメージしていた通りの充実した大学生活を送っています。



経済学部1年次生 多木 友菜 さん

次回のテーマは…「テレワーク時代の働き方」

コロナ禍で在宅勤務などのテレワークが一気に広がりました。3月号(卒業記念特別号)では、関大生が新時代の働き方に対してどう感じているかをリサーチします。



マスコミ/フリーアナウンサー

株式会社オフィスキーワード 市川 いずみさん

京都女子高等学校出身
2010年法学部卒業



野球愛が止まらない。 やりたいことを買けば、夢は実現できます

野球中継や情報番組のリポーター、雑誌のコラム執筆など、多方面で活躍するフリーアナウンサーの市川いずみさんは、昨年からは日本国外のプロスポーツを紹介するNHK BS1「ワースポ×MLB」でキャスターを務めています。

幼い時からスポーツ好きだった市川さんは、中学時代にはソフトボールに熱中し、全国大会に出場します。中学1年の夏、初めて甲子園球場で高校野球を観戦し、スポーツ報道に興味を持ったのだとか。阪神タイガースの優勝で盛り上がった高校時代には、肌で感じた球場の雰囲気をも自分の言葉で伝えるアナウンサーに憧れました。

大学入学後も高校野球への情熱は消えることがなく「スポーツアナウンサーになる」との決意から、地方大会を1回戦から中継している放送局を探し、山口朝日放送に入社。上司からアナウンス技術の指導を受け、高校野球のスタンドリポーターに選ばれます。高校野球の中継では、選手の人柄や試合に懸ける思いを伝えるため、試合前には高校を訪れて選手の話聞き、球児一人一人に寄り添う実況を心掛けています。特に意識したのはエラーした選手の名前は呼ばず、好プレーだった選手の名前を必ず伝えること。そのため実況前夜は繰り返し選手の名前を覚えたそうです。そんな熱意が評価され、ANNアナウンサー賞のスポーツ実況部門で最優秀新人賞に選ばれます。5日目、長年の憧れだった甲子園大会やプロ野球の取材をしたいと考え、フリーに挑戦したそうです。

人とのつながりを大切にしているという市川さん。出会った人たちの人生を知ることでも自身も成長できると言います。「自分のやりたいことを買ってください。好きなことなら続けられるし、続けていけば熱意は周囲に伝わります」とエールを送りました。

ある1日の
スケジュール
(週末、東京
出張の場合)

7:00 起床
7:30 MLB中継で選手のチェックとデータ集計
13:00 朝食
14:00 日本のプロ野球中継のチェック
19:00 NHK入り 打ち合わせと夕食
20:00 メイク
21:00 全体打ち合わせ
22:00 リハーサル
23:00 生放送開始
23:49 放送終了
24:00 NHK退出
24:30 帰宅



必須アイテムは、取材ノート(プロ野球用、高校野球用)、スコアブック、愛用のペンとストップウォッチ。

Announcer

VIVA!!

学び易



法学部 法学政治学科

「専門演習1b」

原 弘明 教授

「走りながら考える」をモットーに、 会社法の新判例に果敢に挑戦。

自分で調べ、考え、答えを出すプロセスを身に付ける。

「会社法の新判例を読む」がテーマである原弘明教授のゼミでは、2009(平成21)年以降の最高裁判所を中心とした判例の分析と検討を行っています。会社法は、経営者と株主、債権者の利害対立を調整することを目的に、会社の組織と運営について定めた法律です。実務で生じた新たな問題に対応するため、2005(平成17)年の施行後、2度改正されました。「社会で実際に起きている新たな課題を知るために、常に新しい判例に挑戦してもらっています」と原教授。

ゼミは、発表者が選んだ判例内容と関連する学説理論、自らの意見をまとめたレジュメを他の学生に配布し、各自が読んだ後に、発表と質疑を行う形式で進めます。教科書に載っていない新しい判例に取り組むことが多いため、原文や学者の論評(評釈)を読み込んで考察し、判決に賛成か反対かを立論するプロセスを学びます。

「ゼミを通して、情報を検索、収集し、読み込む力、理解する力を養うこと。そして、たとえ知らないことがあっても、質疑に誠実に対応することが一番大切です」。原教授は続けて「会社法の基礎知識がないままゼミを履修する学生が多いため、質疑の際に分からない概念を質問し、全員が知識を共有してから考えるようにしています。会社法は、憲法・民法・刑法の知識がないと理解するのが難しい分野です。3年次でこれらの法律を十分に理解している学生は少ないので、分からないことを恐れないでほしいと思います。「走りながら考える」をモットーに、想定外の問題でも懸命に考え、自分なりの答えを出すプロセスを身に付けてください」。ゼミでの成功体験があれば、未解決の問題に出合ったときも、きっと大きな助けになると話します。

「今、取り組んでいる課題に真剣に臨み、途中で投げ出さずに最後までやり切った経験は、将来の進路に必ず役立ちます」と締めくくりました。



戸田佑喜子さん(3年次生)

1年次からアルバイトをしている弁護士事務所
で会社法を取り扱う機会が多いので、会社法を詳
しく学ぶためにこのゼミを選びました。サークルで
国際法を学んでいますが、会社法との類似点や相
違点を知ることができて興味深いです。ドイツ留
学の経験を生かして、ドイツと取引のある企業
で法務の仕事に就くのが目標です。新しい判例を
掘り下げて学ぶには最適のゼミだと思います。



田中健太郎さん(3年次生)

2年次の原先生の授業で幅広く判例を学んで
いたため、個々の判例の学びを深めたいと思い
このゼミに入りました。ゼミでは教科書を読み返
したり、該当する判例と同様の判例を扱っている
問題集を解いたりすることで、知識のレベルアッ
プを実感しています。弁護士を志望しているた
め、ロースクール入学に向けて勉強中です。犯罪
者の更生支援を扱う弁護士になりたいです。

コロナ禍で踏ん張る関大前の商店街

—— 深まる工夫と絆、新規開店の動きも ——

新型コロナウイルスの感染拡大で関西大学の周辺は激変しました。昨年の春から秋学期が始まるまで町から学生の姿が消えたからです。それでも千里山キャンパス前の商店街では各店とも工夫を凝らして「産・官・学」の協働事業を立ち上げ、新たな絆が生まれました。新規開店の動きもあり、町は生きています。

通りから学生が消えた

40年で初めて

夫が1982年に開店した多国籍カフェレストラン^{ケープ コッド}「CAPE COD」のオーナー、木村清子さんはこう話します。

「私は関大社会学部卒なので、学生時代から数えると大学前の商店街を見ながら40年ほど暮らしていることになります。右を見ても左を見ても人が全くない通りは初めてでした」

客足が途絶え、阪急関大前駅からキャンパス正門までの通りにある飲食店など約50店舗の多くは大きな打撃を受けました。そこで立ち上がったのは関大前商店会です。深井喜久会長らが「このままでは多くの店がつぶれる」と危機感を募らせ、各店から聞き取り調査をする中で、ある取り組みが浮かび上がりました。



「産・官・学」のデリバリー

1日150食

きっかけは「持ち帰り弁当を始めるにしても、配達スタッフが確保できない」という各店の悩みでした。そこで商店会自体が注文を取りまとめ、配達するという事業を企画し、10数店が名乗りを上げました。これに「注文側」として吹田市役所や関西大学が組織を挙げて参加。「産・官・学」の取り組みは、全国紙でも大きく取り上げられました。深井会長は「意外だったのは周辺の住民からも多くの注文があったことです。1日に合計で150食も出る日もありました」と言います。



張り合いと絆

ビラ3万枚、休みは3日

気温の上がる7月からは、食中毒防止のため各店ごとの配達に切り替えました。参加した木村さんは「これほど真剣に他の店主さんと話し合い、協力し合ったのは、この商店街で商売を続けて初めての経験でした」と振り返ります。またこの界隈に詳しい「千二地区連合自治会」会長、雑部麻美さんは「店主さんたちは売り上げの激減でげんなりしていましたが、あのデリバリー連携事業で“仕込みして張り合いができた”“心のつながりもできた”という声も聞こえてきました」と話します。木村さんも、個別配達に戻ってからも住宅街にビラ3万枚を配るなどして、店を休んだのはわずか3日間だったそうです。



見慣れない男性

6カ月遅れ

昨年10月中旬、見慣れない男性がこの商店街に現れ、店主たちに名刺を配り始めました。訪問マッサージ業の羽田観陽さんです。2019年の秋、この通りに面したラーメン店の2階を借りる契約をし、春に開店の運びでしたが、コロナ禍で頓挫。ようやく6カ月遅れで開業準備を始めたそうです。「この町は我々の業界にとって有望な地区です。店主さんたちと一緒に頑張ります」と決意を語りました。



社会安全学部 3年次生

三浦 千尋さん

被災地で聞いた教訓をどれだけ伝えられるか。
地域防災につなげることが使命

三浦千尋さんが代表を務めるKUMC (Kansai University Muse for Citizen)は、「高槻市を中心とした地域住民に『防災・減災』の知識を発信する」という理念のもと、防災の啓発活動を行う団体です。「防災教育班」「ハザード対策班」「イベント班」の3班に分かれて、防災意識の向上を目指す活動や高槻市でのイベント運営の補助などを行っています。

高校生の時に、和太鼓部に所属していた三浦さん。3年生の全国大会で宮城県を訪れ、東日本大震災について地域住民の方から話を聞いたそうです。その時

に「同じことを繰り返したくない。自分に知識がなければ誰かを守れない」と思い、災害が起きるしくみや防災について学べる社会安全学部に入学しました。KUMCの活動で、「子どもたちからの質問に、大学で学んだ知識を生かして答えられたときは、学習とボランティア活動の相乗効果を実感しました」と三浦さん。

代表の最も大切な仕事は、200人以上の部員をまとめること。そのため三浦さんは、常に全体の状況を把握し、サポートが必要な班を見極めフォローしているのだとか。一番の思い出は2年次の東北ツアー。企画を担当し、座学のみならず町歩きやVRを使用した防災の勉強、現地の高校生との交流に加えて、名所を調べて観光にも行きました。「東北にはいいところがたくさんあります。それを知っていたらまた行きたい!と思いますし、その輪を広げたい」と話します。

「被災地で聞いた教訓を、私たちが地域の方々にとどれだけ伝えられるか。活動を通してより多くの人に楽しく、正しく理解してもらう方法を考え、伝えていくことが使命です」と力強く語ります。「将来は被災地の魅力を紹介する仕事をしながら、ボランティア活動も続けたいです」と締めくくりました。



2019年夏の東北ツアーで宮城県を訪問

今回は、三浦さんからのご紹介で浅井亜美さん(政策創造学部3年次生)が登場。お楽しみに!



Chihiro Miura

学部・研究科・併設校トピックス

法学部／法学研究科

対面での試験対策も万全に!

1年次生の皆さんは入学して早くも1年が経過しつつあります。春学期がコロナ禍で全面オンラインという特殊な学習環境になった一方、秋学期はwithコロナの観点から、相当数の科目が対面で実施されています。今回が初めての定期試験等による成績評価という学生も多いと思います。過去の授業で得た知識を、条文などを頼りに自分の言葉で正確に表現できるよう、復習をしっかりとって試験に臨んでください。来年度の新入生の範となるような成績を得ることを、切に望みます。

(入試主任 原弘明教授)

文学部／文学研究科 東アジア文化研究科

大学の「学び」

新型コロナウイルス流行以降、学習環境が大きく変化し、学生や院生の皆さんは大変だと思えます。東アジア文化研究科も、院生が来日できなかつたり、対応に大忙しでした。このような事態に、意外に「専門家」の言うことがバラバラで当てにならないことに不満を感じたかもしれせん。しかし、新しい事態に対しては、それぞれの情報を皆さん自身で判断しなければならないのです。実は、大学の「学び」というのは、自分自身で考える力を持つことなのです。共に考えていきましょう。

(東アジア文化研究科副研究科長 二階堂善弘教授)

経済学部／経済学研究科

経済学を学ぶ意義

昨年起こったコロナ禍により、経済活動は大きな打撃を受けています。人が生きていく上で、経済が滞りなく動くということがいかに重要か、皆さんも実感したことでしょう。このような時こそ、経済学の出番です。目の前の停滞への対処はもちろん、長期的な視点から「新しい経済」を作っていくことも重要です。試験が終われば講義内容は全て忘れ去るというのはもったいない話です。学んだ知見の中から、コロナに負けない経済を作るためのヒントを皆さんなりに見つけてみてください。

(入試主任 前川聡子教授)

各学部・研究科・併設校のさまざまな活動や取り組みなど、トピックスや皆さんへのメッセージをお届けします。

商学部／商学研究科

大学院進学者向け早期卒業制度

税理士などの専門職や研究職はもとより、大学院で学んだ専門知識を一般企業や行政職で活用する人が少しずつ増えています。本学部はこのような動きに対応し、「商学部・商学研究科5年一貫教育プログラム」による早期卒業制度を導入しています。成績等に関する所定の条件を満たし、大学院入試(10月募集)の口頭試問に合格すれば、5年間で商学部の卒業(学士の取得)だけでなく、商学研究科博士課程前期課程を修了(修士の取得)することができます。詳細は、教務センターで確認してください。

(副学部長 石田和之教授)

社会学部／社会学研究科

対面授業×オンライン受講

秋学期に対面授業が再開されても、いろいろな事情で大学に来られない学生がいます。心理学専攻の実験実習におけるグループワークでも、メンバーの一部が遠隔で参加するという「ハイブリッド型」のワークに挑戦する班がありました。ZoomやSNSなどを通して、実験案を相談したり、分析作業を分担するなどして、教員が思っていた以上にうまくやっているようです。彼らの様子を見ながら、ハイブリッド授業にとって重要なのは、教員の授業準備だけでなく、メンバーが全員で協力しようという意思だと実感しています。(副学部長 福島宏器教授)

政策創造学部／ガバナンス研究科

新入生向けページを開設

政策創造学部では、新型コロナウイルスの感染拡大によって大きな変化を余儀なくされた今、関西大学で何を学ぶべきなのかを新入生に案内するウェブサイトを開設しました。

コンテンツは、①教員が新入生にお薦めする書籍100冊のリスト、②政策創造学部での学びをキャリアにつなげるきっかけを学生にインタビューした動画、③分野横断的に「まちづくり」について考えるためのコース案内、に分かれています。充実した内容ですので、新入生以外の人もぜひ一度のぞいてみてください!

(学生主任 西山真司准教授)

外国語学部／外国語教育学研究科

この経験が報われますように

新しい一年が始まりました。昨年は、突然一斉オンライン授業となった春学期を経て、秋学期は再びキャンパスに来ることができるようになりました。その間、授業や勉強を見つめ直し、限られた環境の中でできることをするしかないので、自らを奮い立たせた人も多かったことでしょう。また、外国で学ぶという計画を実現できなかった人もたくさんいます。私たちは諦めきれないけれど諦めざるを得ないことを多く経験しました。望まない経験だったからこそ、そこから何かを得たいと強く思います。

(奥村佳代子教授)

人間健康学部／人間健康研究科

コロナ禍での相談援助実習

今年度の福祉と健康コースの相談援助実習は、コロナ禍における社会状況を慎重に検討した結果、従来の社会福祉施設・機関での実習を代替実習に切り替えて行いました。代替実習は、Zoomを使用し、180時間24日間を職場実習・職種実習・ソーシャルワーク実習に段階を追って、学生の学びが深まる内容を準備しました。

これにより、大きな混乱なく、実習を行うことができました。また、この代替実習を補完するために、希望する学生は、実社会福祉施設・機関において、フォローアップ実習を行いました。

(副学部長 福田公教准教授)

総合情報学部／総合情報学研究科

高槻版悠久の庭に!

老朽化したバスケコート、改修工事が終わり、体育館(G棟)横に全面人工芝のフットサルコートができました。主に体育の授業や課外活動で利用されますが、それ以外の時間はフリースペースとして広く学生に開放する予定です。ゆくゆくは「高槻版悠久の庭」になるかもしれません。(学部長 名取良太教授)



社会安全学部／社会安全研究科

卒業研究真っ只中

社会安全学部では、学部の学びの集大成として卒業研究を1年間かけて行っており、学生全員、その成果として卒業論文を執筆し、内容を発表することになっています。今年は1月29日(金)に卒業論文概要の提出、2月19日(金)に卒業研究発表会が予定されており、4年次生は研究漬けの毎日を送っているさなかです。

卒業研究は教員の指導下で行いますが、学生の自由な発想から生まれた面白い研究もあります。これまでの卒業研究のタイトルは学部のウェブサイトに公開されていますので、興味がある読者は確認してみてください。(河野和宏准教授)

法科大学院

TAが皆さんの学修をサポートします!

法科大学院ではティーチング・アシスタント(以下、「TA」という。)が在学生・修了生の学修をサポートしています。法科大学院での学修方法や司法試験の受験に向けたアドバイスを行うだけでなく、大学院生活における相談についても幅広く受け付けています。その中でも、修了生TA(司法試験短答式試験に合格した法科大学院の修了生から選抜)は、より気軽にTAを活用してもらうため、在学生との顔合わせや司法試験模試を企画・実施し、好評を得ています。ぜひ積極的にTAへお声掛けください!(法科大学院オフィス)

関西大学高等部

卒業研究発表会予選会・本選会を開催

プロジェクト学習の集大成として、7月11日に卒業研究発表会の予選会を開催しました。ここでは高等部3年生全員が8分間の研究発表と2分間の質疑応答を行い、教員や生徒のルーブリック評価をもとに、各ゼミから優秀発表者が決定しました。そこから4人が最優秀発表者として選出され、7月20日の本選会において12分間のプレゼンテーションを行いました。3年生の素晴らしい発表を聴いた1、2年生にとって、これから研究を進めていくモチベーションのアップにつながりました。(研究開発部主任 松村湖生教諭)



システム理工学部・環境都市工学部・化学生命工学部／理工学研究科

関大チームがAWS Robot Delivery Challengeで準優勝

電気電子情報工学科の酒部佑介さん(3年次生、写真右)、小田康平さん(3年次生、同左)、虻川翔哉さん(4年次生)が、昨年行われたアマゾンウェブサービス主催のAWS Robot Delivery Challengeで、118チーム中準優勝という素晴らしい結果を収めました。この大会は、各チームが配送ロボットを効率的に動かすためのアプリケーションを開発し、ミニチュアの街中で



れだけ早く荷物を届けられるかを競うものです。関大チームは、昨年5月のウェブ予選で7位、9月にリモート開催された本戦で1位、同日の決勝戦では惜しくも2位となりましたが着実にタイムを縮めていきました。

予選から本戦にかけての時期は、新型コロナウイルスの感染拡大により、キャンパスへの立ち入りや課外活動が制限されていた頃です。そのような状況でも、メンバー同士がSNSを通じて情報交換や議論を日々行い、アプリケーションを改善させていったようです。今まで普通にできていたことができなくな

った非日常においても、目標を見失わずに努力を続けた姿勢はとても頼もしく感じます。

彼らは、電気通信工学研究会に所属しています。同サークルには、文系学生を含めて60人ほどのメンバーが在籍しており、それぞれがプログラミング、ゲーム制作、ロボット製作など興味のあることに取り組んでいます。一昨年には、システム理工学部の学生からなるロボット班が、キャッチロボバトルコンテスト2019でベスト4という結果を残しています。今後も電通研の皆さんの活躍を期待しています。

(システム理工学部 山本真人助教)

Attention 大学からの重要なお知らせ

春季休業期間中の注意事項

—有意義な春休みを過ごすために—

悪質商法に注意!

昨今、全国各地の大学生の間で実際はどの価値もない商品やサービスを高額で購入させる悪質商法(ネットワークビジネスなど)が流行しています。たとえ親しい友人や知人から勧誘を受けても、少しでも怪しいと感じたら安易に応じないようにしてください。

関大生としての自覚を忘れずに!

春季休業中は、今まで以上に行動の範囲が広がりますが、周囲の人々や環境への配慮を怠らないでください。誰か一人の軽率な行為によって、大学の名誉や信用を失墜させる事態を招くだけでなく、他の学生への影響もあります。関大生としての自覚を忘れず、良識ある行動を心掛けるようにしてください。

薬物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」

近年、大学生をはじめ若者の中で大麻による検挙者が急増し、深刻な社会問題となっています。大麻・覚せい剤をはじめとする違法薬物や危険ドラッグを安易に使用することは絶対にしないでください。あなた自身の健康や健全な学生生活を守るためにも、薬物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」

コロナに「感染しない・感染させない」

現下のコロナ禍を踏まえて、感染防止のため、3密(密閉・密集・密接)を避け、外出時のマスクの着用、手洗い・咳エチケットを徹底してください。また、新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCoA)を登録し、静かな飲食を心掛けましょう。学生一人一人が「感染しない・感染させない」行動を。

秋学期試験が終了すると春季休業に入ります。学生の皆さんの行動範囲は少しずつ広がることでしょう。しかし、同時にこの時期は、日常生活からの解放感とそれに伴う気の緩みが相まって、さまざまなトラブルに遭遇しやすくなる時でもあります。

貴重な春休みを有意義に過ごし、新学期または新生活を迎えられるよう特に次の点に注意するようにしてください。

関大トピックス

天皇陵特有の八角墳と確定！ 中尾山古墳の調査に関大生も参加

関西大学と奈良県明日香村教育委員会は、同村の中尾山古墳の発掘調査を行い、墳丘や周囲の詳しい状況や石室内部の詳細な構造を明らかにしました。墳丘は高さ5m以上、対辺長約19.5mの3段構造で、外側に3重の石敷きが施されていたことが判明。石室の内部は磨き上げられ、全面が水銀朱で塗られていたことも確認されました。

文学部の米田文孝教授らは、使用された石材の総重量は約560t、その築造に約2万人の労働者が従事したと推定。天皇陵特有の八角墳であることや石室内部の加工度合いなどから、中尾山古墳の被葬者は天皇かそれに準ずる立場の人物であることがうかがえます。

考古学研究室に所属する田中詢弥さん(文学研究科M1)、山川聡大さん(同M1)、池田旭さん(文4)、小木曾優佳さん(政策2)も調査に参加。貴重な機会に感激しながら、遺構面の検出や土砂の搬出などの作業に取り組んでいます。



(左から) 田中詢弥さん、山川聡大さん、池田旭さん、小木曾優佳さん

関西大×法政大 SDGsアクションプランコンテストを開催

11月7日、法政大学との共催で「SDGsアクションプランコンテスト～持続可能な未来のために私たちができること～」を開催しました。

本コンテストは「持続可能な社会」について主体的に考え、SDGs達成に向けての具体的な提案を行う学生を顕彰することが目的。当日は一次審査を通過した10組の学生チームが、日常の学びで得た知識や柔軟な発想を生かしたプランを発表し、両大学間をライブ中継しました。

本学からは、優秀賞に「文字から文字へのバトン」を発表した「吉田ゼミ」(外国語学部)、クリエイト株式会社・ダイドレ株式会社賞に「ペットボトルキャップの可能性～明日への未来予想図～」を発表した「Plastic For Future」(経済学部)が選ばれました。

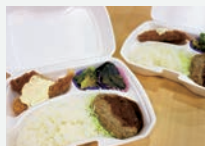


集合写真 (関西大学)

学生を「食」で支援する! 「100円夕食」を開始

11月16日から千里山キャンパス凜風館の食堂で「100円夕食」の取り組みが始まりました。食育環境の充実を目的に2018年から提供している「100円朝食」に続き、コロナ禍にある学生を経済的に支援するもので、教育後援会などの支援と大学生協の協力を得て実施。メニューは日替わりで、ハンバーグやアジフライ、チキン南蛮、豚カツなどをメインに、副菜として里芋、チンゲン菜、インゲンなどの野菜をバランスよく取り入れ、連日大盛況を博しています。

高槻キャンパス、高槻ミュージズキャンパス、堺キャンパスでも類似的のサービスを開始。これらの取り組みは、秋学期の授業期間において実施されます。



関大人 四方山話 ◆「コロナ禍の私たち」 学長 前田 裕

よもやまばなし



沼野玄昌という医師がいた。佐倉順天堂で西洋医学を学び、その重要性を広めることにも熱心な医師であった。1877(明治10)年、日本でコレラの感染が広がった頃、千葉での発生に対応すべく、ある村を訪れるが、村民に誤解され惨殺されてしまう。医師の治療、防疫活動を、村民が誤解した無知による悲劇である。河原にある供養碑には、「討てる人 討たれし人も あはれ松風」(白鳥省吾)の句がある。

いま、我々は未曾有のコロナウイルスと戦っている。医学的にもその

すべてが分かっているわけではない。の中で、自分の行動を律することができているか、罹患者への思いやりや医療従事者への感謝はあるか。厳しい社会状況の中でも自分の目標を失わずにいきましょう。

明治から150年経ち、科学、医学の進歩は目覚ましいものがある。しかし、それを理解する社会や人間の理性はどのように進歩したのか。コロナ禍の我々の行動は150年を経て進歩していたと、150年後の我々に言われるようにしたい。

編集後記

コロナで多くの人の命が失われ、多数の方の人生にも悲劇が訪れています。社会の在り方は大きく変わり、世界中で、サイバー空間を利用した企業活動、働き方、出会いを必死で模索しています。人と人が直接触れ合うことが崇高な価値とされた教育。その伝統がPandemicと呼ばれるこの難局を乗り越える術が問われています。己むを得ずサイバー空間に入り生活するか、明確な意思を持ってそこで自立し活動するか。関西大学の立ち位置が今問われています。学生の方々に最高学府の学生として、我々は大学人として、心して活動していく覚悟を共有したいと思います。(広報委員・システム理工学部教授 田貫佳郎)



関西大学通信 “KANDAI STYLE”

発行日:2021年1月9日

発行:関西大学広報委員会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

電話:06-6368-1121(大代表)

感染拡大予防策を講じた上で、取材や制作を行っています。

今月の表紙



カメラマン:文化会写真部 フィルムパート 今井たからさん(政策3)
モデル:(前列左から)山本稜さん(安全1)、吉村有彩さん(文2)
(後列左から)山岡和未さん(社3)、山口翔万さん(社2)

今回被写体になってくれたのは、写真部の仲間です。また、一人は入部したばかりの1年次生です。私たちが先輩方から教えてもらったようにフィルムカメラの魅力の後輩達に伝えていきたいと思っています。そして、フィルムカメラの魅力が多くの人に伝わればと思います。